

第II期・第1次「オセアニア海域に おける水陸総合学術調査」をおえて

早坂祥三(調査隊・隊長)

南海研が昭和56年度から文部省特定研究経費によって継続実施してきた、「オセアニア海域における水陸総合学術調査」は、昭和58年度の第3次調査をもって第I期を終了したが、このたび、その第II期・第1次として、昭和60年度の調査がミクロネシア連邦(ポナペ島およびトラック諸島)において実施された(次表参照)。

第I期

- 第1次(1981年度)フィジー
12月12日～1月23日(43日間)
- 第2次(1982年度)フィジー、ソロモン
11月10日～12月21日(42日間)
- 第3次(1983年度)パプア・ニューギニア
10月27日～12月8日(43日間)

第II期

- 第1次(1985年度)ミクロネシア連邦
10月30日～12月3日(35日間)

調査は、これまで同様、鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸によって行なわれ、期間は10月29日より12月2日までの35日間であった。調査隊員としては、学内から、南海研を初め医・歯・農・水産・教育・理の各学部とかごしま丸の教官・事務官・技官・大学院生が、また弘前大学・宇都宮大学・京都大学・神戸大学・九州大学・長崎大学・第一工業大学・民族学博物館の教官が参加し、総勢40名であった。調査隊は、隊員の専門分野に応じて次の五つの班(課題)で構成された(カッコ内は所属隊員数)。

- 第1課題(9)ミクロネシアの土地利用と陸上生態系の保全
- 第2課題(6)熱帯水域の物質生産と資源の有効利用
- 第3課題(6)地域住民の遺伝と保健衛生
- 第4課題(7)ミクロネシアの社会及び生活構造
- 第5課題(12)南太平洋の海洋構造とその変動に関する研究

今回の調査は、ミクロネシア連邦における初めての調査で、現地の事情については不明な点が多く、当初は種々の困難が予想されたが、南海研の度重なる先方との連絡や、調査開始直前に南海研が実施した現地予備調査(寺師慎一教授担当)によって万全の準備が整えられた。ポナペ島に本部をもつCommunity College of Micronesiaを初め、連邦政府、州政府所属の諸機関との共同研究として、到着後ただちに各班が行動を開始し、終始順調に、実り多い調査を行なうことができた。洋上における観測や試料採取も予定通り実施され、ポナペトラック間の航海には上記大学の教官1人、学生5人が参加し、六日間の共同作業、船上生活を通して、たがいに親交を深めることができた。

外国での調査は、当該国の数多くの人々の好意に支えられて初めて可能なものであるが、この度の調査には、ナカヤマ大統領、ポナペ州・トラック州知事といった方々の、文字通り国をあげての協力を頂いた。そのような雰囲気の中で隊員全員が参加して行なわれた船上レセプションでは、たがいに打ちとけたおつきあいが随所にくりひろげられ、今後両国間の交流に、はかりしれない効果をもたらしてくれるものと思われた。

今回の調査成果は、今年度内に「調査速報」として印刷公表されるが、これまでの調査と同様、これを契機に、今後ミクロネシア連邦に関する息の長い研究が一つでも二つでも芽生えてゆき、それらの成果が、やがては同国の文化・社会・産業・教育面での発展に寄与してゆくことを、心から念願する次第である。

最後に、財政事情の厳しい折であるに拘らずこの度の総合調査を実現し得たのは、学長初め関係諸氏の並々ならぬ御尽力のおかげであり、こゝに隊員一同を代表して深く感謝申し上げます。

調査隊事務局報告

ポナペ島，トラック諸島調査に至るまで

寺 師 慎 一（調査隊・事務局長）

今度の調査隊では副隊長，事務局長，船医と、3つ大任を受持つことになった。しかしすべてに万全の配慮ある早坂隊長の下にあればその1つの任務無いに等しい。また事務局長の方も南海研センター教官には過去の調査でその経験者もいて心丈夫であった。その反面、本年度は第II期の1年次にも当り予算の獲得，調査地の選定やその国政府の調査許可の取得まで全く零からはじまる不安の多い年であった。

ミクロネシアを調査対象地域とすることが委員会で決定されたが、ミクロネシアのどの国が調査実施にあたって最もその可能性が高いかについての情報に乏しかった。そこでその諸国の事情に詳しい群馬大学の高橋康昌教授、ミクロネシア協会小林 泉 先生の意見を求めて井上センター長と上京したのがその月の末であった。そしてその日、両氏により推薦いただいたのは、すでに東京連絡所を開設し、お互いに交流のあるミクロネシア連邦（FSM）であった。さらに、同連絡所を共にとおずれ Mr. J. RAGLMAR (Liaison Officer) の紹介が得られた。彼は我々の申し入れに対して非常に好意的で、何らの支障もなく調査可能であること、そのためのすべての労をいとわぬとの約束さえしてくれた。

この大きな手掛かりをもとに FSM の1国に焦点を合わせた準備がはじめられた。共同調査・研究についての要望は Mr. RAGLMAR を通して本国に通知してもらうこととなった。一方、岩切教授（水産学部）から同国政府の Mr. Mike GAWEL (Development & Resources) の紹介も得られて文通による調査への協力を依頼した。

調査隊員募集とその最終決定は5月に終えたが、特定研究経費は縮小の必要が生じて6月11日にその最終案を提出した。予算決定の内示は7月6日に受けて、この調査計画もいよいよ本格的なものとなった。その間、同連邦国外務省からセンター宛てに研究調書についての質問や、

『かごしま丸』の入国申請書の送付を受けるなど我々の申し入れに対する反応があり順調なすべりだしであった。

最終的な調査研究計画書は7月に完成し Mr. RAGLMAR もとへ届けると同時に、それに基く本国側の共同研究体制を依頼した。しかし今回は過去3回の調査と異なって農学、水産、地学、社会・文化、医・歯学などの広範囲の研究者を受入れる総合大学がなかった。それだけに共同体制作りのための予備調査・打ち合せが是非必要であると判断され、9月22日～10月8日までミクロネシア連邦（ポナペおよびトラック州）を訪ねることとなった。その出発前、Mr. GAWEL からはこの調査に対し協力する旨の返事を、また調査許可証が8月30日付で外務大臣 Mr. M. NAKAYAMA より発行されたむねの連絡を受けた。そこで、今回の訪問はもっぱら各研究班についての共同研究体制作りに専念出来ることになった。

予備調査・打ち合せは短い期間しかない訪問であったが、ミクロネシア連邦大統領 Mr. T. NAKAYAMA をはじめ、ポナペ州の Mr. R. S. MOSES、トラック州の Mr. G. ATEN の両知事の全面的な支援が大きく、また Community College of Micronesia の学長 Mr. C. L. CANTERIO（ポナペ州）やトラック州の Mr. R. KILLION と Mr. R. MORI の協力も得られて全ては順調であった。

また、この共同調査・研究は鹿児島大学の多数の方々の暖かい援助によって可能となったものである。さらに、これほどの大きな国際交流の発端となったミクロネシア連邦の訪問を御支援いただいた石神兼文 学長をはじめ関係者の皆様に深く感謝いたします。

〔調査の概要〕

第1課題：ミクロネシアの土地利用と陸上生態系の保全

——土地利用の過去・現在・未来学——

林 満 (班長)

ポンペイ州・コロニア港への入港を前にして、ブリッジの双眼鏡に映る島影は、私に南洋の楽園を連想させるものであった。山は、中腹から頂にかけて全く手つかずの原生林、裾にココヤシ林が広がり、裸地が全く目には見えない。そして集落から立昇る煙は炊飯のものらしく弱々しい。この島の営農の具体的なイメージが全くわいてこない、おそらくここは働らかなくても生活出来る楽園であろう。

入港と同時に、第1課題のメンバー9名は、CCM*のMr. A. BOWDENと船上で共同研究の具体的な打合せにはいる。メンバーの構成は、地球物理学2名、地質・古生物学2名、生態学2名、農学3名の4グループで、南海研の特定研究委員会の博識振りが良く示されたユニークなチーム編成である。1人対4グループの話し合は、かなり難航するだろうと思いつつ見守っていると、彼の対応が非常にすばらしい、短時間のうちに双方すべて了解。明朝7時30分行動開始、それも2日かかるとの登山である。目ざすは島の最高峰ナナラウト(772m)で、そこにはほとんど手つかずの自然植生と、世界的に貴重なオトコヤシ、ゾウヤシの自生群落がある。山頂近くのキャンプ地の岩屋は、島の誕生の年代を推定する定方位測定用の岩石の採取に好適であり、また、裾の低地は島で唯一のバナナなどのプランテーション地域で、途中には原住民の村落がいくつもあるという。これだけの好条件が揃えば地球物理、生態及び農学の3グループが参加しての共同戦線がはれる。当日、予定の時刻に出発して、まず麓の村で案内人の青年3名を雇い、登山を始めたのは真昼近くである。海拔0mから始める登山とジャングルの草木を切り開きながら進む登山の経験のない私は、最

初の100mに2時間を要したのにまず驚いた。そして日暮時、我々は目的地からや・遠い、約700mの尾根上にいた。蛍光を発するキノコはいかにも神秘的であり、雨水の重みで谷に落ちる枯枝の大きな音には恐怖すらおぼえながら、一睡も出来ない雨の夜を過ごした。夜明けを待って、朝食をとり、雨と霧の中を岩屋を目ざして再出発した。そして全ての予定を終え、疲れはてて帰船したのは2日目の夕方であった。

700m級の一個の山で、2日間の短期間に、専門分野の大きく異なる全員が効果的な調査活動を成し得たことは大きな収穫と喜びであった。そしてその後も同一行動の中で研究をなす自信を全員が持ったようである。トラック州においても、毎日全員が一隻の船で島々に渡り、地質・古生物学と農学が海岸から裾の低地、生態学と地球物理学が高地といったように、海岸から高地までそれぞれが縦に配置された感じで調査活動を行った。

その間採集された岩石や土壌試料、植物標本類や植物種子などは数百点におよび、これらを携えて凱旋したのである。

基礎から応用に至るまで幅広い分野の9名の研究者が同一チームに編入され、ほぼ同一行程、共同行動の中で各自の活動をスムーズに成し得た意義は誠に大きいと評価している。土地利用を共通のテーマに、各人は分担者の認識を持つことを要求され、それが実行された結果ではなかろうか。私はそれぞれの分担課題を副題の“土地利用の過去、現在、未来学”と捕えていたが如何なものであろうか。

*CCM: Community College of Micronesiaの略(出版小委員注)。

〔調査の概要〕

第2課題：熱帯水域の物質生産と資源の有効利用

—さんご礁の海と水産班—

米 盛 亨 (班長)

本年度の調査隊の中で、水産班は4つのグループに分れて行動した。漁法グループは米盛と2人の留学生(宋・ヘンリー)からなり、かごしま丸の全航程を通じて曳縄漁法調査を実施した。他の曳航物体との競合という不利な条件があったにしろ、擬餌に対する魚の反応がマリアナ列島通過中の1回だけというのは、前回(パプアニューギニア)の31回に比べていかにも寂しい。ポナペ島では漁法班は漁船と漁師をやとって曳縄と手釣を試みた。日本近海では想像もできない程多くの鳥付き群が通過するくせに曳縄の収獲は皆無。海面に跳躍する魚影より1kg程度のキハダ群と推定され、擬餌に対して魚体が小さ過ぎると判断された。他に数隻の操業船があったが漁獲の様子は全く日撃されなかった。独特の深海一本釣漁法で中型マグロを釣るという話には大いに興味を持ったがこれも駄目。聞けば月に2回か3回だけ集中的に漁獲があるという。漁夫の傷だらけの指が1週間前の大漁を物語っていた。このような不安定な漁況を改善する手段としてパヤオ(浮魚礁の一種)を島の周囲に展開するのは極めて有効と考えられる。

前述の鳥付き魚群の移動速度が意外に速い点からも、魚群をひきとめる何等かの対策が必要であろう。パヤオ設置については現地政府から協力要請があったが、日程の都合で実施できなかったことを残念に思う。

珊瑚礁海域に特有のシガテラ毒を追求する南海研の井上は、情報を得て現地協力者と共にポナペ東南方250kmにあるピンゲラップ環礁に飛んだ。大金をはたいて行ったこの海藻魚類調査は貴重な成果をもたらすものと期待される。榎本(神戸大理) 鯨坂(京大農)は過去3回の調査を共にした名コンビ。珍しい海藻を求めて南大太平洋狭しと潜りまくってきたが、今回もポ

ナペ全島の海岸はもとより、西側に離れたアント環礁にも足を伸した。

大野(九大理) 木原(鹿大農)の2人はウニ毒の採集を当初の目標としたが、この種のウニの分布が薄いと判断するや陸上に標的を転じ、毒草葉草の類を手当り次第に採集して持ち帰った。

トラック島では水産班は州政府の調査船を有利な条件で使用できた。日本より供与されたこの船はかなり大きいので、水産班は共同で利用することにした。つまり、共通の目的地をきめて採集部隊を島に上げてから、その近辺で漁法グループは魚の採集(釣り)を行った。往復の航走中に曳縄釣りをを行うのは言うまでもない。この小航海にはかごしま丸乗組員有志も多数参加して協力をいただいた。

トラック環礁は直径が70kmもありその中に大小数十の島が点在し、大部分が無人島である。環礁内部は広いだけでなく最深部は100m近くもあるので、魚も沢山入り込んでいる。

第2次大戦末期に日本の艦船が50隻も空襲で沈められており、それらが魚礁の役目を果たしているのかも知れない。戦後から現在まで爆薬による密漁があとを断たず、魚が随分少なくなったとの嘆きを聞くが、漁法グループはここで初めて数十尾の漁獲があり魚体温分布に関するデータを得た。

モエン港(トラック)に碇泊するかごしま丸の周囲には無数のクラゲが集まったが、大野、木原グループはこれにも食指をのばしてバケツで10杯も採取した。また、榎本、鯨坂組が両島で採集した試料の整理には5年もかゝるとのこと、この貪欲とも云える研究態度には感服の外はない。

〔調査の概要〕

第3課題：地域住民の遺伝と保健衛生

— 健康であることのありがたさ —

松元正(班長)

昭和60年度特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」・ミクロネシア連邦に参加させていただいた第3課題・医学班の活動概要について触れてみたい。調査隊員は6名で、民族衛生学的立場からは弘前大の仁平 将, 三上聖治先生, 鹿大の波多野浩道先生が、また血清疫学的立場からは鹿大の寺師慎一, 貴島宗藏先生と小生が参加させてもらった。小生のような未熟者に班長の大役が果せるわけではなく、今でも見当違いのことと信じて疑わない。優秀で経験豊かな寺師先生と仁平先生にはとくにお世話になり助けてもらった次第である。

医学班はかごしま丸の学生室11号に閉じ込められた。意図的であったとも聞いたが、とにかく曰くつきの部屋であったようである。どのような環境にも順応を示す我々にあっては楽しい集いの場となった。悪天候をついての出航(これも意図的に思えた?)によって、3種類の病的状態が観察された。ベッドから離れることのできない起立不能症候群, 船の揺れがゆりかごのように感じる母体内胎児様症候群およびこれらの中間型である。しかしながら、ポナペ島のソカーズロックやトラック諸島のリーフが見える頃には全て正常に復したようであった。単位を落しそうになった洋上大学は何とか選択課目で取りもどせた。

ポナペ島での医学班活動の中心はポナペ病院となった。Dr. Itor A. HARRIS (病院長), Dr. Ciro BARBOSA および病院スタッフの友好的な協力のもとに、健康成人を対象とした身体計測, 採尿, 採血, 血圧測定などが実施された。住民の方々は我々の突然の訪問に驚いたことであろうし、採血など苦痛を味わったことであろう。

しかしながら、終始笑顔で応対して下さったことに心から感謝する次第であった。最終調査の4日目はCCM*の協力が得られ、総計約150名のサンプリングが可能であった。ナンマドール遺跡やソカーズロックに思いを残してポナペ島に別れを告げた。

トラック諸島ではモエン島にあるトラック病院内での活動となった。Dr. Gerhart ATEN (病院長), Dr. Ngas KANSOU および病院スタッフの友好的な協力が得られた。調査日程は2日間に限られたが、約60名のサンプリングが可能であった。高血圧症クリニックが開かれていることもあって、とくに三上先生の最新機器を用いた血圧測定は重宝がられているようであった。波多野先生はポナペ島とトラック諸島いずれもアンケート調査のため寸暇を惜しんで走り回っていた。調査終了後、医学班は社会文化班に同行し、トラック諸島の島々を巡る機会を得た。ボートで走る海やヤシの林で被われる島々の中に太平洋戦争の傷跡をみることができた。言葉でいいあらわすことは難しいが、そこに暮らす住民の豊かな人情味を膚で感じることもできた。

今回の調査でどのような成績が得られるかについてはまだわからない。これらの成績がミクロネシア連邦住民の健康を考える上に充分役立つものであってほしいと願うところである。また、調査活動を行なうにあたって調査隊員の健康状態は非常に重要であることをこれ程身にしみて感じたことはなかったように思う。

*CCM: Community College of Micronesia
の略(出版小委員注)。

〔調査の概要〕

第4課題：ミクロネシアの社会及び生活構造

松田 恵明 (班長)

社会・文化班は、研究者5名と大学院生2名から成り、「ミクロネシアの社会及び生活構造」をテーマに、ポナペおよびトラック州を中心に言語・宗教・教育・産業を軸として、中広く調査を展開しました。

崎山 理(おさむ)隊員(国立民族学博物館助教授・言語学)は、ポナペ島では、ポナペ語のほか離島の言語モキル語、ピングラップ語、ヌクオロ語；コサイエ島では、コサイエ語；トラック島では、離島ルクノール島の言語について、主として民族語彙(い)＝魚、植物名、カヌー部位名など＝がどのように発音されるか聴きとり録音しました。これら民族語彙の同定は今回が初めてであり、これを比較することによって、それぞれの言語の系統的文化圏の設定が可能かも知れません。ヌクオロ語の調査では戦前染木 煦(あつし)が面接した同じインホームントにつけ感激的でした。

寺田勇文隊員(鹿大南海研助教授・宗教人類学)は、キリスト教と土着宗教の相互関係を中心とした宗教変容を知るために、特にポナペ社会を中心に調査しました。ポナペ社会では、住民の半数がプロテスタントで、のこりがカトリックです。一方、首長ナンマルキを頂点とする厳密な位階に支えられた伝統的首長制が、社会秩序を維持する上で重要な役割を果たしています。このような位階の観念がキリスト教会の内部に導入されていて、それが教会の特色となっています。10年前よりポナペの地域開発に献身している荒川義治牧師夫妻との出会いが印象的でした。

石田尾博夫隊員(第一工業大助教授・社会学)は就学前の幼児教育の実態に焦点をあてました。ここにはアメリカ連邦政府の社会開発計画の一環として、5年前に始まったファミリー・ヘッド・スタート・プログラムがありました。これは低所得家庭の就学前児童を主対象に、家族ぐるみの保健および幼児教育を目的とし、多くの

児童・家庭が参加しています。病院および小学校と直結したこのプログラムは、両州全域を対象とし、就学前幼児の健康チェックと就学準備という社会開発の基本的部分で一定の役割を果たしています。

田島康弘隊員(鹿大教育学部教授・人文地理学)は、経済自立の柱と考えられる観光産業の可能性を検討するために、ホテルを対象とする調査票にもとづく聞きとりのほか、レストラン、土産品店等関連産業や関係官庁データなどを収録しました。ツーリストよりトラベラー(少人数旅行)をという堅実な発展を望む声とともに、グアム方式(パック旅行)を望む声もありました。産業投資部分の拡大のためには、この国の社会構造のより一層の検討が必要と思われます。

松田恵明隊員(鹿大水産学部助教授・国際海洋政策学)他同大学院生野間卓志、石井寿和隊員は独立をめざすミクロネシア連邦の経済自立計画の中核となっている水産開発計画を評価するために、水産業の歴史、漁場利用の動向および水産開発計画について調査しました。戦前最盛期の1937年には、両州で16,508トンのカツオを漁獲し、南興水産や浜一商事等の水産加工場が活況を呈していたと思われるかつての水産現場は、ヤシの木におおわれ、まさに「つわものどもが夢の跡」でしかありませんでした。最近、アメリカとの自由連合という形で仮独立したばかりのミクロネシア連邦では、これまでアメリカの統治下で行われて来た、ラグーン内の漁業は自由という原則が、伝統的漁業権の復権思惑で大混乱しています。この傾向はトラック州で特に強くみられます。さらに、最近では日本の援助で冷蔵庫建設などが両州でも進んでいますが、「輸出産業の振興」というミクロネシア連邦政府の期待と、「内需拡大が先決」とする日本政府の対応との間に大きなギャップがみられます。このように、ミクロネシアには、私達の学問的興味をかきたてる素材が沢山あります。

はだで知り得た南海と浮かぶ島々

南洋の泥にまみれて

松川 進 (第1課題)

土壌の真比重 3.1, これが大きな収穫でした。土壌の単位容積当りの重量表示には幾つかあり、土壌粒子自体の重さを表わす真比重、土壌水分を除いた構造体としての乾燥密度や仮比重、水分を含めた湿潤密度等がこれに相当します。日本に広く分布する火山灰土の粘土鉱物であるアロフェン、モンモリロナイト、カオリナイト等の真比重は 2.7 程度で、これ等の値に慣れた私には異常な値でした。測定に誤りがあるのではと一瞬疑いました。

ポナペやトラック諸島は玄武岩が未風化の状態、転石や礫を混えた複雑な土層を呈しており、亜成帯や間帯土壌に相当するようです。当初は単純に、熱帯特有の鉄とかアルミニウムの酸化物が残留集積したラテライト（ラトソルとかフェラルソルと現在は呼称）の採取を期待してはいたのですが。

宇大農学部教授会で岸本先生（58年度調査参加）が海外出張は飛行機ならば現在は何時でも可能だが、船を利用する事は稀で、急ぎ旅の飛行機では味わえない何かを船旅は与えてくれると力説勧誘され、南海研の調査に参加するだけでも意義があるからとのことで、応募したのが約一年前になります。

同室のH先生曰く「日当から酒代を引くと殆ど残らない大変な野郎が宇大から二人来た」と、乗船当初は酒倉と笑われました。これも陸の上での体調のつもりで計算した酒量でしたが、出航後3, 4日はやはり普段と調子が違い酒を飲む気にもなれませんが、やはり船酔いした様子です。おかげでよくベッドに横になり、K先生には「ベッドで眠

っているか、起きている時はビールを飲んでいるかのどちらかだ」と言われる位でした。

ポナペ島では標高 700 m 付近まで植生分布調査の先生方と登山しましたが、野宿する羽目になり、スコール降る夜一睡もせず過す経験もさせていただき、調査目的追究に専念される先生方の姿に畏敬の念を抱きました。また一方、30度の傾斜地で雨降る中いびきをかいて眠った我がO先生にも敬服するものでした。

調査隊の中で一番汚ない格好をしていたのが私共で、土壌採取中のスコールはやっかいで、全身びしょ濡れ、採土孔には水が湛水、水をかい出すのに一苦勞。因果な商売だと、他の隊員の方を見ながら羨むことしばしばでした。船の中汚れた靴で歩いたことをお詫びします。

開発援助の名による近代化が果して住民に一番ふさわしいのか、悠久に生きる従来の生活様式と自然環境を保持するのが重要か、という古くて新しいテーマを改めて考える契機を与えられたようです。

オセアニア海域の学術調査に 初めて参加して

八田 明夫 (第1課題)

私は有孔虫という原生動物の化石を研究している。化石から得られる情報を考察するためには現生種の知見を多く必要とする。所が生物学分野では有孔虫などはマイナーな分野らしく研究例があまりない。結局、化石を研究する人がこの方面も手がけることが多くなっている。今回の調査ではポナペ島はほとんど火成岩から成っているもので、島周辺の現生有孔虫を採集することにした。トラック諸島では若干の有孔虫化石の報告例があるので、その採集とポナペ同様、島周辺の現生種の採集を目的とした。現地に着くまで、どの様な条件で採集できるかわからな

かったが、センターの先生方の事前の準備とミクロネシア連邦の方々の友情あふれる協力でスムーズに採集ができた。このことに深く感謝申し上げる。

ポナペ島では、海藻研究のグループに入れて頂き、連邦で唯一の大学 Community College of Micronesia (CCM) の海洋生物科の先生方の協力で採集を行なった。ポナペ島の堡礁 (Barrier reef) 内及びアント環礁 (Ant atoll: ポナペの州都コロニアから南西約40 km) 内の有孔虫を採集できた。

毎朝八時半か九時に鹿児島丸の近くで待ち合わせをする。CCM のスペンシンさんかオーストンさんがやって来る。ボートまでトラックで行く。ボートは全速力で目的の海域へ突っ走る。途中スクールに襲われて海に入る前からビショ濡れになることもあった。有孔虫を採集するドレッジャーが海底のサンゴに引っ掛からないよう特製の箱めがねで見ながらの採集である。南海のサンゴ礁の美しさは称えようがない。これを見ただけで今までの苦痛 (船酔い) が忘れられる。アント環礁には石サンゴの中にシャコ貝が沢山いた。外とう膜の色がすごい。紫、青、ピンク、知らなかった！採れたてのシャコの貝柱を試食した。味はあおやぎの貝柱に似た甘味のある素晴らしいものであった。新鮮なものとはかく美味しい。アント環礁に小さな飛行場とホテルを造って観光客を呼ぼうという日本人がいるとポナペの人が話していた。今この環礁にはココヤシの実を採って生活している人が数人いるだけで無人島に近い。コロニアから約1時間半、全速力で走ってやっと着く。途中は外洋なので波も高い。現在の条件なら、環礁内は自然そのままだ。ポナペの人もこのままにしておきたいと言った。私もそう思った。

トラック諸島では、エオット島という小島で凝灰岩質のかなり変質した石灰質礫岩を採集した。が、化石は期待できそうになかった。トラック諸島の各島の周辺で採集した現生種の試料に期待したい。トラック諸島では陸上を歩くことが多かった。島の子ども達は我々日本人を珍しがった。我々が岩石を採集するために山の中を歩くとぞろぞろ付いて来た。小学6年の子が

自分は科学者になりたいと言って岩石の入ったリュックを担いで歩いてくれた。島の子どもがヤシの木に登り、実を取って御馳走してくれた。乾いたのどには最高の御馳走だった。

楽しかったことばかり書いたが、私の場合船酔いについて述べねば正直ではない。何人かの人が、酷い船酔いに悩まされた。最も酷かった人を3人に絞っても、その中に含まれる自信がある。ダーウィンはビーグル号航海記、下巻P. 197 (岩波文庫) に若い人に世界を航海して探検することを勧めたあとで次の様に書いている。「船酔いにひどく悩む人は、それを重くみた方がよい。私は経験によっていうが、それは1週間で直せるさ細な災厄ではない」まさにその通りなのである。しかし、のど元過ぎれば熱さ忘れるの如く、機会があったらまた参加したいと思っている今日このごろである。

ミクロネシア調査行の思い出

波多野浩道 (第3課題)

今回のミクロネシア行は、私にとっては実質的に初めての海外調査であった。出港して4日目には、早く帰りたくて仕方がなかった。船酔いだった。船酔い番付けは大関といったところか。最初の寄港地ポナペに着くと、カウンターパートとの打ち合わせがあった。現地司会者が最初に CCM (Community College of Micronesia) の学長を紹介しようとした。おそらくミクロネシア最高の学識経験者であろうその人は誰かと皆が注目したが、それらしい人はいなかった。隅で塩の吹きでた野球帽をかぶり、Tシャツ、短パンにサンダル履きの人が学長だった。服装はいつでも、どこでも、誰でも、いたってラフであった。

服装といえば、女性のシュミイズの下部にレースの刺繍を縫いつけるのが流行しているのが、多くの店で売っていた。原色が好まれるようであった。実は、テーブルクロスと間違えて、買ってしまった。女性は総じて太めであった。

ポナペからトラックへの航海には、CCM のスタッフ1名と学生5名がかごしま丸に乗船し、洋上大学や海洋観測に参加した。お別れパーテ

ィの席で学生全員が『蛍の光』を日本語で歌ってくれることになった。皆、感激した。しかし歌い始めると大笑いになった。彼等にかかると蛍の光はまるで阿波踊りで、楽しい歌になるのだった。

第二の寄港地トラックでの日曜日には、日本対ミクロネシアのソフトボール試合を行った。結果はサヨナラ負けだった。調査の疲れが出たと思われる。

現地での調査活動は主に班単位であった。私は医学班であったが、他の班の活動も見聞きする機会があった。活動を終え船に戻ると、食堂や居室で、その日の事を話しあうのだった。時には、冗談からハプニングもあった。ポナペのナンマドール遺跡観光の際、前日行った一行からレストランもあるが、ネクタイが必要だと聞かされた隊員が、まんまと騙された。騙された二隊員はともに社会班であったのは偶然か。

かごしま丸での私の居室は、一番の大部屋 No. 11 Cadet であった。溜り場だったので、引込み思案(?)の私にとって、大勢の隊員から話しを聞くのに幸した。ライフスタイルそのものに学問がにじみでている人、何でもまず分類してみる人等々、個性的な研究者ばかりであった。なかでも専門を異にする先生方の発想や研究姿勢が勉強になった。

帰国後、早二ヶ月近くたった。参加動機は研究上のそれにあっただが、今となってはむしろ様々な人々と出会えたことにあっただといえそうだ。ミクロネシアの人々との国際交流、学内・学外の隊員との研究・生活を通じた学際的交流、さらにはかごしま丸乗船員の方々との親交が、私にとってミクロネシア行最大の収穫であった。出港四日目にして、帰りがたつたにもかかわらず、今では次を楽しみにしている始末である。

トラックでのカツオ1本釣り 漁船乗船記

石井 寿和 (第4課題)

11月25日の午前6時、まだ太陽の昇り切っていないモエンの港を後に、松田助教授、ヘンリー(鹿大大学院のパプア・ニューギニア留学生)

と私はトラック人によるカツオ1本釣り日帰り漁船に乗船する機会を持つことができた。この船は、19トン型カツオ1本釣り漁船(Garanup)で日本からの賠償船でありJICAの近藤氏の指導の下、船長、漁船員、20名すべてトラック人による操業である。

まず、船外機付きの小型ボートを曳網しながら40分でEdt島とUdot島の間にある生き餌の漁場に直行する。その間に、甲板の上では3匹のカツオをつぶして生き餌の餌造りをし、それが終わると朝食をとる。朝食といってもビスケットぐらいの大きさのカンパンを2枚だけである。餌を獲る漁場に着くと、小型ボートに12名が乗り込み、本船から離れ、酸素ポンペを背負った4人が網を海底に設置し網の上に餌を置く。他の人はそれぞれボートの上や素潜りで作業をする。いわゆる敷網と呼ばれる漁法である。テキパキとした作業で1度の餌獲りが約30分で終り、バケツに5、6杯の体長9cmぐらいのアカムロが獲れ、この作業が5、6回繰り返された。

そして、餌獲りを終えると本船とボートは離れ、いよいよ、沖合のカツオを追いかけるためノースパスからリーフの外に出る。リーフからおおよそ5km離れリーフに沿って南下し、海面の上空を乱舞するカツオ鳥をさがす。夕方4時頃、ようやくカツオ鳥を見つけ船内はあわただしくなる。カツオ鳥の方向へ全速力で近づく。船首と船尾の釣り台に8名ずつ分かれ、釣り子は竿を持ちスタンバイする。生き餌をまく2名が、豪快に餌を上空に向かってばらまきカツオを船に引き寄せようとする。さらに散水ポンペから放水。餌付けが悪く1匹も釣れない。再び左舷前方に見えるカツオ鳥めがけて突進する。しかし、結局この日は、途中の曳網によるシイラ1匹であった。機動性に優る船外機付きの小型ボート(曳網漁法)との競合、漁労技術、操業時間帯、生き餌の問題など、多くの問題を内にかかえている。

この船によって漁獲されたカツオの一部は漁業協同組合へ、その他はグアムへ空輸され、船員の給料は1日1人5ドルである。早朝の生き餌獲りから始まり、サウスパスからリーフ内に入り、モエンの港に着いたのは午後7時30分、

海の男達の1日の終りである。

貴重な体験を持つことができたことは、今後の

トラック人自身による商業的漁業の試みなど、
 今度の調査に参加させていただき他にも多くの

私に多くの影響を与えずにはいられない

昭和60年度特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」
 (ポナベ島およびトラック諸島)

調 査 隊 名 簿

研究代表者	井上晃男	鹿児島大学南方海域研究センター長・教授・海洋生態学
隊長	早坂祥三	鹿児島大学理学部・教授・地質及び古生物学
副隊長	寺師慎一	鹿児島大学南方海域研究センター・教授・病理学

第1課題・ミクロネシアの土地利用と陸上生態系の保全

隊長	早坂祥三	鹿児島大学理学部・教授・地質及び古生物学
班長	林満	鹿児島大学農学部・助教授・熱帯作物学
隊員	安川克己	神戸大学理学部・教授・地球物理学
隊員	伊藤秀三	長崎大学教養部・教授・生態学
事務局	中野和敬	鹿児島大学南方海域研究センター・教授・生態学
隊員	大場信	宇都宮大学農学部・助教授・農業水利学
隊員	八田明夫	鹿児島大学教育学部・講師・地質及び古生物学
隊員	松川進	宇都宮大学農学部・助手・農業造成学
隊員	井口博夫	神戸大学理学部・教務職員・地球物理学

第2課題・熱帯水域の物質生産と資源の有効利用

班長	米盛亨	鹿児島大学水産学部・教授・漁法学
研究代表者	井上晃男	鹿児島大学南方海域研究センター長・教授・海洋生態学
隊員	大野素徳	九州大学理学部・助教授・酵素化学
隊員	榎本幸人	神戸大学理学部附属臨海実験所・助教授・藻類学
隊員	木原大	鹿児島大学医学部・講師・生理学
隊員	鱒坂哲朗	京都大学農学部・助手・水産資源学

第3課題・地域住民の遺伝と保健衛生

班長	松元正	鹿児島大学医学部・助手・腫瘍学
副隊長・事務局 局長・船医	寺師慎一	鹿児島大学南方海域研究センター・教授・病理学
隊員	仁平将	弘前大学医学部・講師・衛生学

(次頁につづく)

(前頁より)

隊員	波多野 浩 道	鹿児島大学歯学部・助手・予防歯科学
隊員	三 上 聖 治	弘前大学医学部・助手・衛生学
隊員	貴 島 宗 蔵	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員

第4課題・ミクロネシアの社会及び生活構造

班 長	松 田 恵 明	鹿児島大学水産学部・助教授・国際海洋政策学
隊 員	田 島 康 弘	鹿児島大学教育学部・教授・人文地理学
隊 員	崎 山 理	国立民族学博物館・助教授・言語学
隊 員	石田尾 博 夫	第一工業大学教養部・助教授・社会学
事 務 局	寺 田 勇 文	鹿児島大学南方海域研究センター・助教授・宗教人類学
隊 員	野 間 卓 志	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員
隊 員	石 井 寿 和	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員

第5課題・南太平洋の海洋構造とその変動に関する研究

班 長	東 川 勢 二	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸船長・助教授
隊 員	西 徹	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸一等航海士・講師
隊 員	有 馬 純 宏	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸次席一等航海士・助手
隊 員	益 満 侃	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸二等航海士・助手
隊 員	内 山 正 樹	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸三等航海士・助手
隊 員	山 口 照 男	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸機関長・助教授
隊 員	堀 脇 秋 男	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸一等機関士・技官
隊 員	田 中 久 雄	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸二等機関士・技官
隊 員	吉 満 幸 雄	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸通信長・技官
隊 員	帖 地 純 隆	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸通信士・技官
隊 員	日 高 正 康	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸事務長・事務官
隊 員	島 里 錠 次	鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸・事務官

事 務

事 務 局	有 村 正 男	鹿児島大学南方海域研究センター事務室主任・事務官
-------	---------	--------------------------

そ の 他 (調 査 隊 随 行 員)

Nagaleta Henry Lekisi	鹿児島大学大学院水産学研究科・漁法学(パプア・ニューギニア)
宋 文 杰 (ソン・ウェンジェ)	鹿児島大学大学院水産学研究科・漁法学(中華人民共和国)
浜 田 俊 二 郎	南日本新聞社文化部記者

南方海域研究センター昭和61年度

特定研究委員会名簿

委員名	学部等	構内電話番号
片山忠夫	農学部	5480
田尻英三	教育学部	3723
茶圓正明	水産学部	水産 300
早坂祥三	理学部	4310
平田八郎	水産学部	水産 530
柳橋次雄	医学部	宇宿 2109
◎井上晃男	南海研	2053
中野和敬	〃	2054
寺師慎一	〃	2056
寺田勇文	〃	2057
林満	農学部	5107
松田恵明	水産学部	水産 362
米盛亨	水産学部	水産 330
松元正	医学部	宇宿 2203
東川勢二	水産学部	水産 380
石村満宏	法文学部	3105

◎は委員長

(敬称略)

研究報告会のご案内

昭和60年度特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」(ミクロネシア連邦)の研究報告会を下記の通り開催します。多数の皆様のご出席をお待ちしております。

記

日時・1986年3月20日(木)、午後1時より

会場・鹿児島大学理学部1号館2階201号教室

(南海研センター隣)

なお、研究報告会終了後には、懇親会を予定しております。

南海研センター第1回公開講座

〈南太平洋〉をおえて

●南海研センターでは、昭和60年度から一般市民を対象とした公開講座を実施することになった。東南アジアや南太平洋諸国に対する知的関心を深めるとともに、センターがおこなっている南方海域地域での総合学術調査の成果をわかりやすく公開することを目的にしている。第1回の公開講座は「南太平洋」を総合テーマとして、夏期休暇中の1985年8月7日～9日の3日間にわたり開かれ、南太平洋とその周辺地域としての東南アジアに重点をおきつつ、珊瑚礁の生態から農耕文化、熱帯病、そして言語や人びとのくらしぶりにいたるまで、1日3回計9回の講義がおこなわれた。

●公開講座の計画・運営には、センター研究小委員会とセンター教官があたり、6月中旬までにポスターと募集要項を学内外の関係機関・個人に配布。受講生の定員は、当初はセンターの共同研究室の収容力を考えて20名としたが、7月末の締切時には応募者が40名をこえた。いそいで会場をセンター隣の理学部1号館201号講義室に変更するとともに、希望者全員を受講生として受け入れた。40名が受講生として登録されたが、その年令層・職業は別表のとおりであり、10代の高校生から60代の実年層まで、実に多様な構成となった。

●講義は、およそ1時間の講義・スライドを利用しての説明ののちに、質疑応答の時間をもう

けてあったので、わりと自由な雰囲気なかで受講生と交流できたようであった。会場は、理学部のご好意により、冷房設備の完備した中規模の講義室を使用できたため、真夏の午後でもどうやら暑さと降灰からは逃れることができた。しかし、会場内の音響条件など、来年度以降に改善すべき点もあった。

●受講生総数40名に対して、各講義の平均出席者数は30数名にたった。受講生のなかには勤務先に休暇届けをだして出席された方がたも少なくなっただけに、その熱意には頭がさがる思いであった。3日目の最終講義の後には修了式がおこなわれ、センター長から受講生に修了証書が交付された。その後は会場をセンターの共同研究室に移して、講師と受講生を中心として懇親会が持たれた。

●今回の公開講座はセンターとしては、何分はじめての企画だけに、いろいろと反省すべき点もすくなくない。受講生に簡単なアンケートに協力してもらったので、受講生の声（解答者16名）を紙面のゆるす限り、紹介したい。

〈テーマ・内容・講義方法など〉

「文系のテーマがすくない。歴史・文学・芸術なども開講してほしい」「他方面にわたって興味深い話をきけた」「スライドの多い講義が昼食後にあると、ねむかった」「もっと質問の時間がほしかった」「横文字の参考書を提示され

テーマと講師

	テーマ	講師(所属)
1	南太平洋の珊瑚礁	井上晃男(南)
2	南太平洋の海の道	新田栄治(養)
3	南太平洋縁辺の地下資源	根建心具(養)
4	南太平洋の言語	田尻英三(教)
5	南太平洋の森と畑	中野和敬(南)
6	南太平洋の熱帯病	尾辻義人(医)
7	南太平洋の魚と人びと	平田八郎(水)
8	南太平洋の農耕文化	片山忠夫(農)
9	南太平洋の社会と生活	岩切成郎(水)

(敬称略)

受講生の年令層

年令層	男	女	計
10代	2	0	2
20代	8	6	14
30代	1	3	4
40代	7	7	14
50代	1	2	3
60代	2	1	3
計	21	19	40

受講生の職業

職業	男	女	計
高校生	1	0	1
学生(院生含む)	3	1	4
公務員	9	0	9
教員	1	2	3
看護助手	0	1	1
主婦	—	8	8
アルバイト	1	4	5
その他の職業	3	0	3
無職	3	3	6
計	21	19	40

でも困る」「大変わかりやすい講義であった」「南太平洋というテーマがとても魅力的だった」「自然科学の分野から人文科学への提言がほしかった。新しいものや珍しいものを発見し理論化することから一歩すすめて、南方民族のありさまにふれてほしかった。講師の熱心で学究的な態度に好感がもてた」「いろいろな角度から見た南太平洋の話だったので、毎時間が新鮮だった」

〈時期・期間・講義数・会場など〉

これについては、現状のままが適当という解答が多かった。その他に「会場の音響条件が悪く、ききとりにくかった」「講師の声がちいさくて困った」「コーヒーなどのサービスがあってよかった」「この時期に3日間休めるのは、教員・主婦そして学生ぐらいではないか。2週間に1回とか、日曜に開講してはどうか」「1週間くらいつづけてほしい。昼食時間をもっと長く」「2日間で8講座がよいのでは」など

〈今回もっとも関心を持ったテーマは〉

「言語—とくに東南アジアにおける英語の勢力拡張に関心があるから」「熱帯病—身近かにフィラリアやマラリアにかかった人を見ていたので」「農耕文化、社会と生活など—有用植物の遺伝子資源保全に関心を持っているので」「珊瑚礁、魚と人びと—エメラルド・グリーンの海と珊瑚礁へのあこがれから」「地下資源」「森と畑—講義をきいて熱帯の森林が確実になくなっていくことを知り、考えさせられた」「海の道—物の伝播に興味があるので」

〈今後どのような公開講座・テーマを望むか〉

「アセアン諸国について知りたい。歴史・文学・言語・音楽・映画など」「南太平洋の葬祭、民

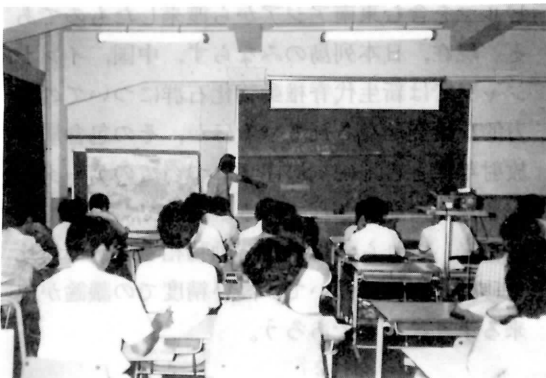
間信仰など」「政治の動き、とくに核の問題」「南方の宗教」「食生活、歴史」「南太平洋の民俗—衣食住のすべてを含む」「芸術や民俗文化について」「現地調査の方法や、調査船で現地に行くまでの過程を」「今回は内容をやや絞ったもの、たとえば農業関係であればタロイモの作り方と料理の方法など」「クジラとイルカなどの海洋生物について」「南太平洋の風俗習慣などを、私たちの生活との類似・相違の観点から」「南島の民芸品、音楽、住居、伝説、価値観など」「台湾について」

〈その他〉

「心楽しく聞くことができ、ストレス解消にもなった。いい企画である。もっと多くの人たちにきいてほしい」「ビデオなどを活用して、生活状況などの講義をしてはいかがか」「ともかくも楽しい3日間であった。ただもうちょっとゆっくり昼食をとりたかったのですが。3日間休みがとれて本当にラッキーでした。最高の夏です。1日目と2日目には灰まみれ、3日目は行きも帰りもびしょぬれ……いやサイコーでした。講座にはいろいろな方がみえていて、それだけでも楽しさがありました」

●次回は、今回の経験をもとにより充実した公開講座となるよう努力したいと思う。最後に、この紙面をおかりして、講師の先生がた、林満委員長をはじめ研究小委員会の方がた、受講生募集に際し多方面に連絡をとってくださった学内外の皆様、会場を心よく提供してくださった理学部、本部およびセンターの事務部の方がた、会場案内板を用意してくださった美術部の学生の皆さん他に、感謝申し上げます。そして夏の日に通いつめてくださった受講生の皆さんに感謝します。

(寺田勇文記)



東南アジアおよび大陸との関連からみた日本の 新生代脊椎動物化石相について

大塚 裕之 (理)

日本列島は動物地理学的には、北方系の動物相からなる旧北区と熱帯系の動物相からなる東洋区の両区にまたがり、両動物相の境界は琉球列島の種子島・屋久島と奄美大島との間に存在するといわれている。従って、日本列島、とりわけ南九州を含む琉球列島は動物地理学上、興味深い地域の1つであるといえよう。アジア大陸の北東縁に位置する日本列島は地質時代の新生代第三紀末期から第四紀末期にかけては、氷期の海水準降下によって、水深の浅いところが次第に陸化して陸橋を形成し、また現在の大陸棚は低陸地を形成した。その結果、これらの新しく出現した陸地を通じて、大陸や東南アジアの陸棲動物群が何回か日本列島へ移動した。現在の日本列島に生息する動物相は過去の氷期の陸地形成期の渡来者の遺存種であるといえる。

約200万年の長さを有する第四紀全体についてみると、それぞれの各低海水準期に大陸および東南アジアから独得の動物群が渡来したが、それらは現在、化石動物群として認められる。例えば、第四紀前期(約200万年前)の明石一口之津動物群は中国北部の温帯森林性ないし草原性の動物群やさらにインド・東南アジアの熱帯ないし亜熱帯に知られる化石動物群に関連がある。中期のトウヨウゾウ動物群(約50万~70万年前)は中国北部の周口店動物群や南部の大熊貓(大パンダ)——東洋象動物群の日本列島への延長であると見做されている。第四紀末期——つまりウルム氷期(約3万~1万年前)最盛期の動物群は、いわゆるマンモス動物群は北海道で産出するマンモスや本州のオオツノジカやヘラジカによって代表され、主として日本列島の北部に知られている。この動物群は日本列島の現生動物群の主構成要素で、ライチョウ、ナキウサギなどがこれにあたる。ニホンザルやカモシカなどは中期のトウヨウゾウ動物群の中の遺存種である。また古い動物群ほど、その遺

存種が現生動物群に残存している割合は少ない。

一方、奄美大島以南の琉球列島にはイリオモテヤマネコやアマミノクロウサギのように、地質時代に繁栄したものが、島々へ渡来後、島嶼の形成によって地理的に隔離され、その子孫が遺存種として多く生存している。またこの列島には日本本土に分布しなくて、ここだけに分布する固有種が多い。それらは特に生物分布境界線が走るトカラ海峡以南に特有である。またこの現生動物相の他に、この海峡以南に発達する琉球石灰岩の裂か(フィッシャー)や洞穴堆積物には、新第三紀型の古型鹿類の他、ネズミ類、イノシシ、カメ類などを多産する。堆積物の放射年代は約22000年 B.P.~約18000年 B.P.を示し、これらの化石動物群がウルム氷期のものであることを示している。鹿類化石には2種類あるが、いずれも中国大陸北部の新第三紀鮮新世の地層に多産する種にすこぶる近縁である。これらの鹿は、琉球石灰岩堆積前の陸化・侵食期(約150万年前)に大陸から渡来し、南琉球を経て奄美群島まで及んだが、当時既に形成されていたトカラ海峡(渡瀬線)のため、それ以上北上しなかったものと考えられる。

以上に概説した日本各地の陸棲脊椎動物化石群は地質時代における日本列島の大陸との陸繋と島嶼化という古地理的変遷につれて、それぞれの時期に中国大陸からか、あるいはインド・ビルマを含む東南アジアから渡来したものである。現在、日本列島のみならず、中国、インド、ジャワでは新生代脊椎動物化石群についての精力的な研究がなされているほか、その包含層の放射年代と古地磁気層序学についてのデータがさかんに発表されている。従って、極めて近い将来、これら各地の化石動物相と地層の対比や移動の問題について、高い精度での議論が出来るようになるであろう。

〔第42回研究会発表要旨〕

多民族社会の位相

— ビルマ近況報告 —

高谷 紀夫 (教養)

「民族」とは何か、Ethnic Identityとは何かというテーマは文化人類学の重要な問題でありながら実はその定義と内容が余りはっきりしていない。それはひとつには「主観」が「民族」の意識にかかわっているからである。二年近くのビルマ滞在において接した多民族世界の実相は Ethnic Identity の再考を促した。それはまた民族の境界を固定的にとらえた上に成立する民族間の「似ている」的着想から、多民族を総体的にとらえる「そんなもの」的認識への転換を意味した。ビルマ多民族世界の実態は多彩な模様となって文化の諸相を形造っている。連邦記念日の盛大な各種催しと提示される政治目標は民族の団結を第一に唱い、少数民族の名前がついた州の存在は政府の少数民族に対する配慮をうかがわせ、また祝祭日の中に Karen 族新年、回教祭、Hindu 灯祭が含まれていることはその実態を明示している。ところがこれらにうかがわれる民族区分と文化的実相は必ずしも一致しない。少数民族の間にも *lummyogyi* (大きな民族) *lummyonge* (小さな民族) の識別がある。即ち並列的で固定的な民族区分では、多民族にわたる文化の広汎性やその間の力関係を見逃してしまうことになりかねないのである。

Ethnic Identity をたどるひとつの端緒は彼等の「他民族—よそのもの」観に見える。*kabya* と呼ばれる混血のカテゴリ—は、西洋人、中国人、インド人との通婚による子に該当し、Shan 族、Karen 族等との場合は「……の血が含まれている」と表現される。つまり「他民族」といっても均質的なものではないのである。

別の手掛かりは、ビルマの精霊 (Nat) 信仰の構造に見られる。ビルマでは単独の祠もさることながら、Mt. Popa, Rangoon, Pagan 等の

各地で複数の精霊像を祀る祠堂に出会う。そしてこれらの精霊起源伝説には民族間の文化交流がモチーフとして示唆的に含まれている。たとえばビルマ最大の精霊祭礼 Taungbyon の主人公は父がインド (あるいはアラブ) 系の二人の兄弟である。Shan 族との接触、交流は Ko Myo Shin 伝説に示されている。また家の守護霊として祀られる Min Maha Giri の伝説は Tagaung 王国がその主舞台であるが、彼が超自然的能力を持つ鍛冶屋であることと彼と妹の霊が宿った木が Irrawaddy 川に流されて Pagan に到着するモチーフは、他民族と連関する文化の交流を暗示している。そしてこれらの伝説には他にもいくつかの構造的 analogy が見られる。ビルマでポピュラーな精霊がその地域性、民族性を越えて重複していることは、精霊信仰の性格と体系化の背景を示唆すると同時に、各民族の個別な Ethnic Identity とは別に、もうひとつ広汎で総体的な Identity がその背景に関与していることを示すのではないだろうか。換言すれば他民族に対する柔軟性のあるとらえ方がそこに介在しているように思われるのである。

過去に多くの民族が接触と交流を繰り返してきた。それは「よそのもの」との同化と抗争の歴史でもあった。そして *kabya* の出自である「よそのもの」は、伝統的な「そんなもの」的「よそのもの」識別の境界を越えるものとして流入してきたともいえるのである。概念の多極化と錯綜がそこに起きた。文化の多様性は、単に諸民族の併存を前提とするのではなく、民俗概念としての「民族」の動態をたどることをその考察の一端としなければならないのである。

〔第43回研究会発表要旨〕

外洋に出現する仔稚魚

小沢 貴和 (水産)

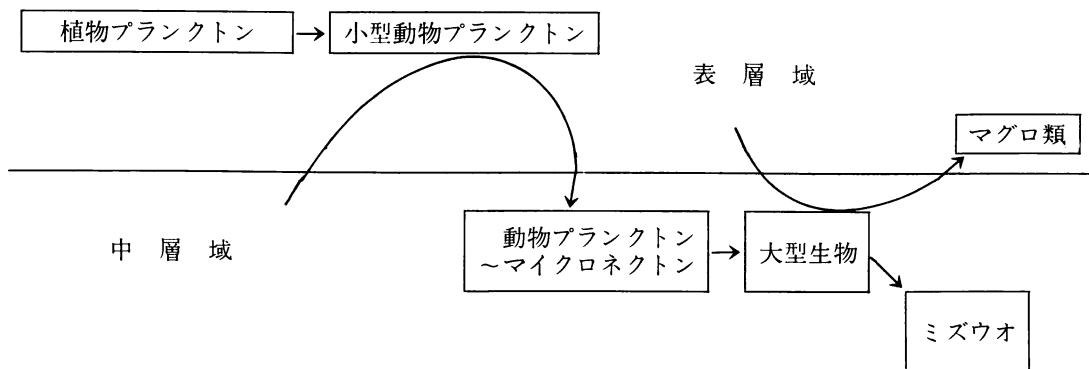
沿岸域の外側である広大な外洋に出現する仔稚魚は沿岸性のもとの質量ともに相違する。優占種は中層域のヨコエソ科やハダカイワシ科などの仔稚魚であり、それらの初期形態発育の研究により外洋に出現する仔稚魚の90%が種のレベルで同定可能である。その知見をもとになされた研究の中で以下の3件を報告した。

1. 北西太平洋域における仔稚魚の時空間的分布を以下に示す。鹿児島からニューギニアにかけて採集された仔稚魚の種組成等を比較すると表層水塊に対応した仔稚魚相がほぼ周年にわたって見出された。即ち、10°N以南の赤道流域では沿岸性や外洋表層性の仔稚魚が特徴的であり、10°N~20°Nの低生産域では仔稚魚量が少なくハダカイワシ科仔稚魚が特徴となり、20°N以北の亜熱帯域では多量の仔稚魚が出現しかつヨコエソ科のヤベウキエソが最優占種であった。

2. 東部インド洋で仔稚魚組成の分析と、マグロ延縄で漁獲される大型魚として中層魚ミズウオと表層魚キハダの胃内容物分析を行った。そ

れらの結果をもとに、外洋表層で生産されたエネルギー物質は大型動物プランクトンと中型魚類の日周期垂直移動により中層域に取り込まれ保存されるのが外洋域の捕食連鎖構造であり、中層域の豊富なエネルギーを求めて表層魚であるマグロ類は逆垂直移動により中層域の生物を捕食することを示した(図参照)。

3. ダルマガレイ科は幼期にのみ出現する外洋域の1時的表層魚の代表であり、大きく成長し長期の浮遊期を送る。北西太平洋で幅広く採集された約4,000個体は10属24種に識別された。それらの水平的分布を初期仔魚と拡散期仔魚において比較した結果、3タイプの分布域が認められた:陸棚域に生息するタイプ(代表種トサダルマガレイ);大陸島と赤道流域島に分布するタイプ(同ダルマガレイ);前タイプの分布域に加えて外洋島にも生息するタイプ(同コウベダルマガレイ)。又、第1タイプの拡散域が第2タイプの分布域に広がっている事実は、ダルマガレイ科幼期に無効拡散することを示唆している。



外洋域におけるエネルギー転移の模式図

〔第44回研究会発表要旨〕

腔腸動物の生活史，および形態形成に
かかわる環境条件

柿沼 好子 (理)

腔腸動物は一般に、ヒドラ、クラゲ、サンゴ、イソギンチャクなどに代表される無脊椎動物群である。この動物群の生活様式はきわめて複雑で、多様性に富んでいる。基本的には浮遊性のプランクトン生活と固着性のベントス生活の2様式であるが、それらの組み合わせにより生活史には種によっては終生プランクトンのクラゲ型 (medusa type)、幼生の一時期のみに浮遊生活を行ない、あとは終生固着生活を行なうポリプ型 (polyp type)、また、生活史の中で世代の交代ごとにポリプとクラゲの両方の生活様式を交互に行なうポリプ+クラゲ型 (alternation of generation) があり、更にそれぞれの単体型、群体型、分業型や退化型など様々なバリエーションも見られる。

生活史のタイプを簡単に示すと、次のようになる。() 内は生活様式である。

(1) ポリプ型 (固着生活型) :

ポリプ→プラヌラ幼生 (浮遊)→ポリプ (固着)

(2) クラゲ型 (浮遊生活型) :

クラゲ→(浮遊)→プラヌラ幼生 (浮遊)→クラゲ (浮遊)

(3) ポリプ+クラゲ型 (世代交代型) :

成体クラゲ (浮遊)→プラヌラ幼生 (浮遊)→ポリプ (固着)→幼体クラゲ (浮遊)→成体クラゲ (浮遊)

(1)では直接ポリプより、またはポリプの群体の生殖巣 (子嚢) より放出されたプラヌラからポリプへの変態、(2)では成体クラゲより、放卵放出されたプラヌラからクラゲへの変態、(3)ではプラヌラからポリプに変態し、ポリプからクラゲに変態し、さらにクラゲの幼体から成体までの変態も見られ、生活史の複雑さをうかがい知ることが出来る。

これらの生活史の中で生息環境条件が変化することにより、しばしばポリプ型クラゲやクラ

ゲ型ポリプの出現、あるいはポリプ+クラゲ型生活史のクラゲ型生活史への転換、形態の変更や可逆性、クラゲの異常発生が起こる。

卵発生、幼生の変態、ポリプの成長、群体形成、成熟、クラゲ芽形成、クラゲ遊出、老化などの一連の生活現象のなかで、それぞれの種が生活生存するための生活史の完成には、それぞれの種の内的環境である各発生段階の分化能力の出現と、外的環境である分化への刺戟が必要である。光や温度など物理的環境条件の変化により、発生の制御機構に著しい影響が見られ、器官分化、形態形成の促進や抑制などが起こる。また、ロダソータやシアンカリ等を与え、化学的環境条件を変えると、種の特性として考えられている触手の発現物質や、ポリプ形成時の極性の転換などが起こる。これらより腔腸動物群の形態形成能力出現の内的環境条件と形態形成を完了する外的環境条件の深いかわり合いが示唆される。

殊に底生生活を行なう種では、幼生の基質への付着が個体としての器官分化を促進し、形態形成を完了する。このことより生活史の完成に幼生の付着に関する底質環境条件が重要であると考えられる。殊に共生種では着生の底質環境に選択性をもち、形態形成や生活生存のために他の種類の動物及び植物の特異的生物環境を必要とする。このような共生種では、両種間における卵発生から老化に至るまでの様々な発生段階において、相互に依存し合う極めて緊密な相互関係が見られ、その種の生息場所における生息環境のみならず、宿主の年令や生理的状態の変化によってポリプやクラゲ芽の形態形成が制御されるもの、また、さらに、宿主からの種特異的生体生理活性物質や生体代謝分泌物などに優占的に繁殖する微小生物群集とそれらの遷移的変遷によって形態形成が二次的に著しく制御されるものがある。

シンポジウム「南方漁業の未来像」

1985年10月8日

I 南方漁業の資源動態

1) カツオ漁業の現状と問題点

肥後 道隆 (鹿水試)

南方カツオ漁業は、西経150度以西の太平洋を漁場に、竿釣・まき網が各々10万トンずつ漁獲し、資源状態もほぼ安定している。しかし、漁業の社会環境は、魚価の低落、燃料費の高騰等で、竿釣は低迷、まき網は発展、が現況である。漁業の経営安定方策として資源量に対する適正努力量、需給のバランス等、社会的な問題点も多く抱えている。これらを整理しながらカツオ漁業の将来像を画こう。

2) 南方海域におけるマグロ資源

鈴木 治郎 (遠洋研)

南方海域で最も重要なマグロ資源はキハダで、他にはメバチやビンナガがわずかに漁獲されるにすぎない。当海域のキハダの漁獲は大型魚を漁獲するはえ縄漁業が主体であったが、近年小型魚を対象とするまき網漁業の漁獲が増加し、資源の開発が進んでいる。当海域のキハダ資源評価の信頼性を増す為には、漁獲統計と生物学の知見の蓄積が必要であり、資源的に余裕のあるカツオと開発の進んだキハダの漁獲調整も重要な課題である。

3) カツオ・マグロ資源の国際管理

米盛 保 (遠洋研)

第二次世界大戦後、世界のカツオ・マグロ資源は日本を中心とする一部先進国により独占的に開発された。その後、この漁業への直接参加または潜在的に関心を持つ国の増加に伴って、カツオ・マグロの調査研究、統計収集、資源保

存などを目的とした多くの地域的な国際機関が設立され、このような高度回遊性魚種の国際管理が始まった。一方、1970年代後半に始まった沿岸国の200浬水域設定により、カツオ・マグロ類も沿岸国の管轄権を強くうけることになり、漁業の管理方式も変貌しつつある。

II 南方漁業の社会的評価

1) 国連海洋法成立の経緯とその意義

高林 秀雄 (九大法学部)

200カイリ制度は定着したが、200カイリの内外を問わず、広大な海域を回遊するカツオ・マグロ類については、その回遊範囲を全体的に管理する国際漁業機関の権限と、200カイリ水域内における沿岸国の権限との関係が重要である。こうした高度回遊性魚種の管理について、国連海洋法条約の審議経過とその問題点を論ずる。

2) 南方漁業における国際協力

松田 恵明 (鹿大水産学部)

南方海域における島嶼国との漁業に関する国際協力は二国間あるいは多国間で、特惠制度、資源調査、合弁事業、低利融資、無償援助、技術・教育援助等の形でなされて来ている。日本に対する期待は非常に大きい、場あたりの漁業協力は限界に来ている。そのため、共存共栄のための国際協力とは何かを模索され始めている。対立ではなく協力、コントロールではなく自治、目先の利益より長期的展望のある投資の重要性が認識されつつある。

3) 島嶼漁業の現状と問題点

岩切 成郎 (鹿大水産学部)

小規模な国民経済のなかで、各島嶼国の漁業が産業ないし生業として占める、地位や役割について観察するのが目的である。外貨獲得・雇用拡大・食糧自給など外部からの視点と、慣習法的漁場規制・共同体の労働形態など内部の条件を分析する。伝統的資源維持と漁獲努力の関係、生産の発展と国内・外市場の限界との関係などが今後の課題である。

高林秀雄氏 (九大法学部)

南方漁業における国際協力

松田恵明氏 (鹿大水産学部)

島嶼漁業の現状と問題点

岩切成郎氏 (鹿大水産学部)

■第46回 (1985年12月16日)

「マダガスカルの稲作について」

中釜明紀氏 (農)

■第47回 (1986年1月27日)

「フィリピンの中の水産技術教育事情」

野呂忠秀氏 (水産)

センター研究会・活動報告

1985年7月から1986年1月までの南海研センターの定例研究会およびシンポジウムは以下の通りであった。

■第43回 (1985年7月22日)

「外洋に出現する仔稚魚」

小沢貴和氏 (水産)

■第44回 (1985年9月30日)

「腔腸動物の生活史、および形態形成にかかわる環境条件」

柿沼好子氏 (理)

■第45回 (1985年10月8日)

「南方漁業の未来像」と題するシンポジウムが水産学部16号教室で開催された。演題は以下の通りであったが、諸発表の後、総合討論があり、活発に意見が交換された。

I. 南方漁業の資源動態

カツオ漁業の現状と問題点

肥後道隆氏 (鹿水試)

南方海域におけるマグロ資源

鈴木治郎氏 (遠洋研)

カツオ・マグロ資源の国際管理

米盛 保氏 (遠洋研)

II. 南方漁業の社会的評価

国連海洋法成立の経緯とその意義

南海研センターの出版物

(1985年7月～1986年1月)

■『南海研紀要』 6巻1号

本号には以下の論文が掲載されている。

永浜伴紀・藤本滋生・菅沼俊彦：ヤムイモ、タ

ロイモ、およびキャッサバの澱粉について

Akio SHINAGAWA, Teruo HIGASHI and Tadao

C. KATAYAMA: Back Soils, Coastal Sands,

and Marine Sediments of Nagura Bay

in Comparison with Those of Kabira

Bay, Ishigaki Island, Okinawa Prefecture

Teruo HIGASHI, Tadao C. KATAYAMA and

Akio SHINAGAWA: Land Development

Works and Soil Erosion in Okinawa

Prefecture

Tadao C. KATAYAMA, Akio SHINAGAWA and

Teruo HIGASHI: Agricultural Environ-

ment of the Back Land of Nagura Bay,

Okinawa Prefecture

Shin-ichi TESHIMA, Akio KANAZAWA, and

Yoshihiro UCHIYAMA: Effects of Dietary

Protein, Lipid, and Digestible Carbohy-

drate Levels on the Weight Gain, Feed

Conversion Efficiency, and Protein Effi-

ciency Ratio of *Tilapia nilotica*

Takahiko OGATA, Noritomo KAWAJI, Kazuharu

(22) 南海研だよりNo.15

MINE and Miyoko YAMAMOTO: Human Skeletal Remains from the Teama Site, Marakei Island, Gilbert Islands, Republic of Kiribati

新田栄治: バン=マイ村の土器作りと東南アジアの叩き技法——タイ・スリン県・ムアン郡・バン=マイでの例から——

崎村弘文: 奄美大島中部方言のアクセント体系・再考

Akira NAGATOMI and Keiko TAWAKI: *Nemomydas*, New to the Oriental Region (Diptera, Mydidae)

Kanetosi KUSIGEMATI: Mesochorinae of Formosa (Hymenoptera: Ichneumonidae)

Seiki YAMANE, Yutaka HARADA and Masami YANO: Ant Fauna of Tanegashima Island, the Northern Ryūkyūs (Hymenoptera, Formicidae)

■『南海研紀要』 6巻2号

本号所載の論文は以下のとおりである。

Yasuhiro TAJIMA: Marketing in Papua New Guinea

寺田勇文: 聖霊との〈交流〉——フィリピンにおける民衆カトリシズムと憑霊——

Akira NAGATOMI: A New *Ptiolina* from Nepal (Diptera, Rhagionidae)

Kanetosi KUSIGEMATI: Three New Species of *Retalia* Seyrig from Formosa and Japan (Hymenoptera: Ichneumonidae)

Elof Machten KATIANDAGHO and Takehiko

IMAI: Fundamental Studies on the Fishing Efficiency of Purse Seine

Masaki YAHIRO, Norihiko YASUHIRO and Shigeru HIRA: Effects of Various Day-length-Treatments on the Growth of Shoots and the Dormancy of Lateral Buds in Mulberry

■Occasional Papers No. 4

Shozo HAYASAKA ed. Marine Ecological Studies on the Habitat of *Nautilus pompilius* in the Environs of Viti Levu, Fiji.

これは南海研センターの兼務教官である理学部早坂祥三教授を研究代表者として行なわれたフィジーのオウムガイの生態に関する文部省海外学術調査をまとめたもので、全編10編の論文からなる。このフィジーにおける調査も本研究センターの「オセアニア海域における水陸総合学術調査」を契機の一つとしており、その報告書を本研究センターの出版物に数えることができた意義は深い。B 5 版, 96頁。

■Occasional Papers No. 5

Shin-ichi TERASHI ed. Scientific Survey of the South Pacific, 1981-1983: Fiji, Solomon Islands and Papua New Guinea.

これは表題からもわかるとおり、南海研センターが1981年から1983年にかけて3回実施した「オセアニア海域における水陸総合学術調査」第1期3か年の成果をまとめたもので、23編の充実した論文からなり、その関係する分野は多岐にわたる。B 5 版, 243頁。

南海研だより No.15 昭和61年2月28日発行

鹿児島大学南方海域研究センター

〒890 鹿児島市郡元一丁目21-24 電話 0992(54)7141 (内線)2058